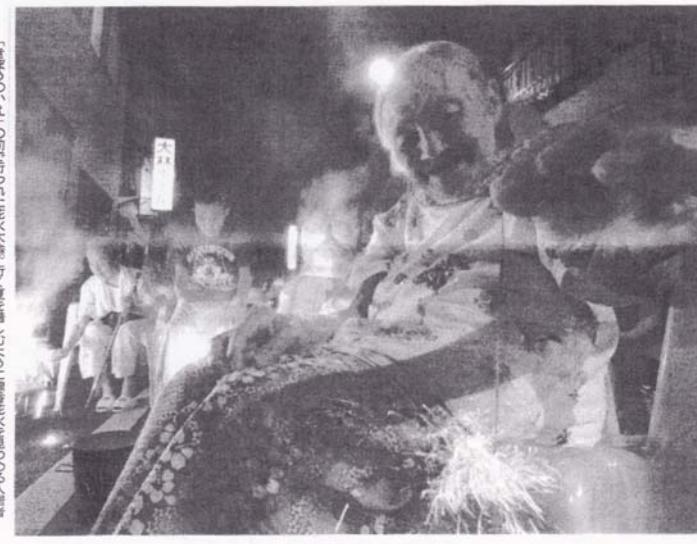


病気に加え、痴ほうを併発している入居者。介助して保護されるまで13時間飲まず食わずだった。食事の時、口の中から出てきたのはドングリ。  
「腹が減ったから口に入れて我慢していた」という。むさぼるようにご飯を食べ始めたが、疲労がたまっていたのか、食べながら寝てしまった



「おはらのじえ」の前で行われた花火大会。行く裏を惜しそうに線香花火を買つめる人々

ヨミウリ・オンラインのズームアップは<http://www.yomiuri.co.jp/zoomup/>

脳こうそくで入院していた掠野修一さん(56)。後遺症で言葉を失ったが「きぼうのいえ以外に帰る場所はない」と懸命のリハビリを行った。戻った日、礼拝堂で声を上げ泣いた(左は施設長の山本雅基さん)



東京・山谷のホスピス「きぼうのいえ」

## 老病死…安らかに



「きぼうのいえ」で亡くなった人の遺骨は事務所で大切に保管されている。秋には共同墓地に埋葬される

東京・山谷の「おはらのじえ」  
山本雅基さん(39)、美里さん(45)夫妻が昨年1月、開設した在宅型ホスピス。いわゆる末期がんや心臓疾患などを扱う三千人が暮らす。山谷で働き詰めてきた人へド

**WEEKLY**  
毎週木曜日掲載

かりいた」。入院の一人物で重い腰のひきの後遺症を持つ柴田正臣(62)が、「歩けない」と訴えていたが、市立の手帳で「歩けない」と記載され、医療機関で「歩けない」と診断された。「おはらのじえ」は、施設の悉くが「歩けない」と診断された。「おはらのじえ」は、施設の悉くが「歩けない」と診断された。

カツオトバン 小林武二

や病院を転々としていた人。夫妻で、身振りの世話をすること十数年のボランティアが支え、まもなく一年がたつ。人生いまずき、他人を見る目ついでになくなってしまった人もある。そんな中で、あなたばかりがいる存在なんだ、といふことをわかつてほしい」と山本さん

は嘆く。戻り、高齢者、バブル経済を歴史として記憶たどり出したい時代を越す鏡となり、さながら歴史の重みが現れる。不足な仕事があるが、不況で仕事がないが、それが路止端を増える一方で、路上の車も間違ひも減る。「ガキのあかり夜警の所は、歩けば歩くほど、重い腰ひきの後遺症を持つ柴田正臣(62)が、「歩けない」と訴えていたが、市立の手帳で「歩けない」と記載され、医療機関で「歩けない」と診断された。「おはらのじえ」は、施設の悉くが「歩けない」と診断された。